

取扱注意

(航空作戦に対する寄与を含む)については必ずしも第1義的に考慮しなかつた所に問題があるように観察される。

○ 32Aの本来有している航空基地軍的性格並びに敵の沖縄攻略について予想される目的に鑑み、全般作戦上からは敵をしてわが本土攻略のために沖縄を空・海基地として使わせないこと即ち前項による「敵の空・海基地設定の制扼」(沖縄に対するわが航空作戦を容易にするための敵の飛行場使用妨害を含む)を最も重視すべきではなかつたらうかと観察される。

○ 又状況により9Dの後継が実現されて決戦任務に転移することあるを考慮しておく必要があり、否むしるこれが具現について不屈の意志をもつて上級司令部に強硬に働きかかすべきではなかつたかと思われる。(9D抽出による打撃があまりに大であつたため32A首脳部が諦めに似た境地となつたのは無理からぬことではあつたが。)

(c) 32Aが任務判断においてこのように全般作戦上推論される任務として敵の空・海基地推進の制扼を第1義的に重視せず、地上軍自体による出血持久をより重視したことは後述するように本状況判断の判決に大きく左右し、遂に北・中飛行場地区を實質的に放棄した島尻案を採用するに至り、上級司令部との間に大なる紛争を惹起するに及んだ。

取扱注意

取扱注意

(d) 32Aが敵の空・海基地推進の制扼を第1義的に考えなかつた原因

1 10号作戦準備以来の32Aの根本思想が航空に対する不信心から航空作戦に対する寄与よりも陸上作戦を主体とした思想であり、この考えが航空を主体とした比島作戦が、はかばかしく進捗していない当時の状況によつて益々根強くなりつあつたこと。

2 上記に関連しわが有力な飛行場を敵に与えることが、わが航空作戦及び今後の本土作戦に及ぼす影響についての突きつめた検討が必ずしも十分行われなかつた感みがあること。即ち全般作戦上における飛行場の価値についての認識において大本營程に重視していなかつたことは事実であり、32A作戦準備の回想によつても端的に言えば「10万の軍隊が飛行場と心中することは馬鹿げたことだ」という考えに近いのが実情であつたようである。

(e) 参考所見

任務の解釈は、正に状況判断の根基をなすものであり、特に全般状況から第1義的に要請される要素についての判断を誤ると上級司令部の意図に添わない判決を採るに至る。

自軍の立場のみに拘せしめることなく、全般状況において自軍の占める地位を大局的立場から至当に判断するとともに疑義のある場合は卒直に上級司令部の意向を訊くことが、肝要と考えられる。

取扱注意

取扱注意

(a) 地形判断特に中頭・島尻両地区の価値の比較（I巻P
121～122）

(a) 32Aの判断

新作設計画策定に方り、32Aが地形について如何に判断したかについては、まとまつた資料がなく新配備に關する行動方針の中頭案・島尻案の比較において断片的にその考えが出でいるに過ぎない。

而してその判断は概ね戰術的な判断特に軍砲兵による橋頭堡殲滅射撃の實行及び持久の見地からのみの検討に偏した係みがあるように見受けられる。

即ち兵力の減少に中頭・島尻の何れを重視すべきか等わが行動方針決定の資料として両地区の価値を戰略・戰術の見地から総合的に比較して見る必要があるように思われるが、この見地からする検討は必ずしも行われなかつた模様であり、この結果中頭地区の価値をやや軽視するに至つたのではないかと觀察される。

(b) 中頭・島尻両地区の価値比較

当時における中頭・島尻両地区の戰略・戰術的価値の比較については別表のように考察され、既述のような任務判断即ち32Aとして最も重視すべき敵の空・海基地の制約のうち敵の港湾占領を最終的に重視し、かつ、持久作戦の見地よりすれば総合的にわれにとつては島尻地区の価値がやや大とも謂い得るが、当面の重要飛行場との關係よりすれば中頭地区の価値がより

取扱注意

取扱注意

大であり、特に敵にとつては当面の目標として最も適合しているので決して輕視を許さないものがあるように觀察される。

取扱注意

取扱注意

比較要素	順位
戦略的事項	
沖縄本 的位置	中 頭
重要を制し得	中 頭
港	島 尻
戦術的事項	
決戦形稍々錯 たぬの上陸公	中 頭
橋頭堡 軍砲兵	島 尻
特	島 尻
兵	島 尻
政略との関	島 尻

見すれば總体的に島尻地区の
綜 覧における全般的位置よりす

取扱注意

中頭・島尻西部地区の価値比較意見表

取扱注意

比較要素	区 分	中 頭 地 区	島 尻 地 区	順 位
戦 略 的 事 項	沖繩本島における全般的位置	略々中央に位置し、本島を南北に分断・伊江島との関連大	南に偏す。	中 頭
	重要飛行場	北・中飛行場を制す。(220高地帯及び島袋高地帯)	小禄及び南・東飛行場を制す。北中飛行場も長射程砲により辛うじて制し得る。(首里周辺高地帯)	中 頭
	港 湾	那覇港及び中城湾を制し得ない	那覇港及び中城湾を制す。(首里周辺高地帯)	島 尻
戦 術 的 事 項	決戦又は戦術的攻勢のための機動	攻勢のための両軸心を有し最も公算の多い嘉手納海岸正面からする敵の上陸に対し狭撃の利を収め得る。	台地が海に迫り、沿岸撃滅容易。地形稍々錯雑しているが機動路に富む。但し敵の上陸公算は嘉手納海岸正面に比し稍々劣る。	中 頭
	橋頭堡殲滅射撃のため軍砲兵の運用	軍砲兵の事前温存不利、又は道路網に乏しい	軍砲兵の事前温存有利・道路網に富む。	島 尻
	持 久	やや薄弱	堅 固 (特に首里周辺高地帯)	島 尻
	兵 站	補給源に遠い	補給源に近い	島 尻
政略との関係	政治・経済の中心	中心よりやや遠い	島 尻	
綜 合		戦略持久の見地に立脚し、かつ沖縄を最終的に敵に利用させないため港湾を最も重視すれば總体的に島尻地区の価値がより大である。しかし敵の緊急当面の目標となる重要飛行場との関係及び沖縄における全般的位置よりすれば中頭地区の価値がより大である。		

取扱注意

(c) 緊要地形について

取扱注意

以上の見地に基き当時の状況にかいて32Aとして特に重視を要する緊要地形については、次のように考えられるのではなからうか。

1 首里周辺高地帯

嘉数-雨上原以南、与那原-那覇間の首里周辺高地帯は、那覇港・小浜飛行場・中城湾を制し、又北・中飛行場をも長射程砲を以て制し得るほか、南北正面に対し最も良好な横断区劃を形成し敵に出血を強要しつつ持久を図るためにも最良の抵抗地帯であるので32Aとしては、最も重視すべき要点と思われる。

2 220高地(読谷山)周辺高地帯

読谷山塊及びその分岐した座喜味の高地は島袋高地帯と並んで嘉手納海岸正面及び北・中飛行場を制するとともに、沖縄北部と中・南部の連絡路を扼しており、首里周辺高地帯の北・中飛行場及び嘉手納海岸に及ぼす威力が長射程砲の火力のみであることを補う意味においてこれに次いで重視すべき要点と考えられる。

3 島袋周辺高地帯

220高地周辺高地帯と並んで嘉手納海岸正面及び北・中飛行場地区を制する2本の柱であり、かつ敵が同正面より南下する場合の旋回軸に相当しているため、220高地帯とともに首里周辺高地帯に次

取扱注意

取扱注意

いので重視すべき要点と思われる。

- (d) 32Aが中頭地区の価値をやや軽視した感みがある原因

既述のような32Aは任務判断において空・海基地の制約特に飛行場との関係を必ずしも第1義的に重視せず地上軍独自による敵の撃破乃至消耗に主体をおいた関係もあり、やや戦術的な地形判断に偏し、中頭地区の占める戦略的地位をも総合した検討が必ずしも十分行われず、具体的には220高地帯及び島袋高地帯の価値を軽視した傾向があつたことが大きく影響しているように観察される。

- (e) 32Aの地形判断が上記のようにやや戦術的判断に偏した感みがあつたことにも関連し島尻地区特に糸満海岸正面からする上陸をも過度に重視した嫌いがあるとともに、嘉手納海岸正面に対し、手を抜き過ぎる結果になつたのではないかと見受けられる。

- (f) 又勝良間諸島については良港な泊地たることは認められていたが、山地急峻でTKの使用に適さないとの見地から、敵の占領を予期し得なかつた。なお神山島・津堅島等の沖縄本島上陸のためのFA障地としての価値を看過していた感みがあることは、大綱的な敵情判断に偏し、敵の上陸実行部署に関連する細密な地形及び

取扱注意

取扱注意

敵情判断が十分行われなかつたことに起因しているものと思われる。

- (g) 参考所見

地形判断は任務の解釈によつて著しい影響を受け、又敵情判断にも大なる影響をもたらすものである。

上陸防御における地形の判断において敵の上陸行動の難易及びこれに対するわが歩・砲の戦力発揮等の戦術的判断も、もとより重要であるが、これに偏し、重要な各地区(予想される敵の主上陸正面)の有する戦略的地位即ち当該地区の占める全般的な位置・飛行場及び港湾との関係等からする価値についての比重について特に留意を要するものと考えられる。

又その反面において敵の上陸実行の部署(過程)に関連した細部の地形及び敵情判断が粗漏に流れないよう注意を要するものがある。

取扱注意

(3) 判決特に航空作戦との関係及び企図の表現

取扱注意

(a) 判決特に航空作戦との関係

1 32Aが島尻案を採用したことは、既述のような32Aの考え方即ち軍砲兵等を以てする橋頭堡築射撃の有効な実施並びに己むを得ざる場合も地上軍独力を以てする持久を主とした思想に立脚すれば、現戦力に適合した優れた策案であつたと思われる。

2 しかしながら任務の解釈で述べたような考え方、即ち当時における国軍全般作戦上の見地から要請される敵の空・海基地特に飛行場の推進を制約することを第一義的に重視する思想及びこれに基く既述のような地形及び敵情判断に立脚すれば、兵力配備の重心が、やや南に偏し随つて最も重要な北・中飛行場地区の制扼が十分でないとともに大規模な配備変更を伴い、又9Dの後詰が若し実現された場合に必ずしもこれに即応しない感みがあるように解釈される。

3 本判決が爾後の作戦に及ぼした影響

○ 本判決は実質的に爾後における沖縄作戦の運命を決した感があり、32Aが北・中飛行場地区を事実上放棄したことは、後日示された大本營の意図とは異つていたため爾後32Aと上級司令部及び航空部隊との間に大なる紛争を生ずることとなつた。又作戦実施に方りわが航空作戦の指導は相当困難となり、32A自らもこの問題に関連して

取扱注意

取扱注意
の既定方針と上級司令部の要請との板挟みとなりその作戦指導に苦悶することとなつた。

○ 又大なる配備の変更を伴うことになつたので、従来の作戦準備の大半が徒勞に帰し、各兵団・部隊の棄城意欲を減殺したことは少からぬものがあつた。

○ しかしながら島尻地区における陸上作戦自体は極めて手堅いものとなり、作戦実施において圧倒的な米軍の戦力に対抗しつつ漸く多大の出血を強要し、3ヶ月にわたりよく組織的戦力を發揮して貴重な時を獲得する根基となつたものと洞察される。

4 32AがA主力を島尻地区に集約するに至つた原因。

その根本的原因は、32Aの包摂していた戦略思想が大本營の思想とは異なり航空に対する不信心から地上軍自体の作戦を本位とする考え方に傾いていたことが、9D抽出に対処する状況判断にも大きく影響し、この思想に立脚して任務及び地形判断等が行われたことにあるのではないかと推察される。又9D抽出に伴う精神的打撃もこの間において少なからぬ影響を与えているように看取される。

5 宮古島よりの兵力抽出について

本判決に関連し理論的には他の島嶼特に宮古島が

取扱注意

ら28D又は1=MB₀を沖縄本島に抽出転用する案も当然考えられるが、当時32Aとしては全然そのような考えは浮ばなかつたと言われている。(20年1月84Dの派遣が中止された後においても)即ち当初の計画による各島嶼毎の固定配備の概念が強く影響していたことと9Dを抽出されたのと同じ舌杯を宮古島の守備部隊に替めさせることは統帥上到底忍び難いものがあつたものと推察される。又本土からの後詰を必ずしも全然期待し得ないという状況でもなかつた当時としては無理からぬことではなかつたかと思われる。

b 参考所見

わが行動方針は、任務についての解釈、地形及び敵情判断により著しく左右され、これらの前提についての正しい思考の上に立つて立案されなければならないことが痛感される。

特にその根基をなすものは既述のように任務判断であり、これについての上級司令部との思想の一致並びに透徹した思索が最も重要と考えられる。

(b) 全図の表現

本状況判断にもついで19.11.25示された32Aの新作戦計画の方針は次のとおりであり、全図の表現の見地からも多くの問題点を包蔵している。132Aは1部を以て極力長く伊江島を保持するとともに主力をもつて島尻地区を占領し、島尻地区主防禦陸地帯沿岸においては敵の上陸を破挫し、北方主陣地帯陸正面においては戦略持久を策する。敵が北・中飛行場方面に上陸する場合は主力をもつて同方面に出撃することがある。]

1 全般を貫く方針が、決戦であるか、戦略持久であるかの趣旨が必ずしも明確に表現されていないように見受けられる。

即ち32Aとしては、敵が喜手納海岸(北・中飛行場)正面から上陸する公算が最も多いと判断し、これに対してA主力を島尻地区に集約して首里陸正面において戦略持久を策する構想であるから全般を貫く方針は戦略持久的考えであつたと思料されるが、この点が明確でない憾みがある。

本件は作戦補佐参謀の回想によれば、当時32Aと思想を異にし飛行場を極度に重視していた上級司令部に対する愚迷等により戦略持久たることを明白にし得なかつたと言われている。

2 敵の空・海基地推進の制約については一言も触れられていない。

本件は既述のように当時の全般情勢上から32Aに要請される第1義的任務であつたと思われるが、32Aは敵の撃破乃至は消耗をより重視していたこ

取扱注意
とが、これによつても逆に窺われるように観察される。

5 提案者たる作戦幕僚が、北中飛行場方面に対する出撃を心中では考えていなかったにも拘らず、上級司令部に対するゼスチアもあつて、これを敢えて方針に付加したことは幕僚業務上重大な問題が潜んでいるものと考えられる。即ちA長及び幕僚長は、文字通りに解釈し決裁を与えられたのではないかと思われるからである。(本件について作戦幕僚は最近の回想において終戦直後このように作戦記録に書いたのは蒸の走り過ぎであつたとも釈明されているので若しそれが真実とすれば勿論あえて問題にするべき事項ではない。)

6 上記諸件は何れも作戦実施に方り、敵が現実北中飛行場方面から上陸して来た際、これに対する取巻について司令部内及び上級司令部との間において思想の不統一を生じた有力な原因をなしたものと観察される。

5 参考所見

企図の表現は、一切の思惑を排して明確に行わなければ、作戦実施において由々しい大事を招来することを銘肝すべきであろう。

又単に戦術持久等の兵学用語だけでは目的が明確でないので、L空・海基地の制約T・L敵に対する出

取扱注意

撃の強要T・本土作戦への審判T等について更に具体的に作戦目的を明示すべきではなからうかと考えられる。

取扱注意

(4) 部署特に戦況推移の洞察との関連

- (a) 最も公算の多い敵が喜手納正面から上陸した場合に
応ずる部署及び指導要領について次のような問題点がある
ように観察される。

1 62Dの担任正面

最も生起の公算の多い首里陸正面の戦いを担任す
べき62Dに濠川正面までも担任させたのは、正面
過宏であり、濠川正面は糸満正面との関連もあり、
当初から24Dに担任させるべきであったであろう。
(本件は20年1月、44MBをも知念半島に集約
し、再度配備変更を行う原因となつた。)

2 24D等を陸正面に転用する時期

戦況の推移を予察した場合、最も問題となること
は、敵が喜手納海岸正面から上陸し62Dの陸正面
陣地が攻撃を受けた場合、何時を目途として24D
を陸正面に転用するか、又この際糸満或は濠川正面
に対する敵の新上陸に如何に対処するかであり、こ
の点に関する32Aの事前検討は必ずしも十分でな
かつたように見受けられる。
(本件は作戦実施に方り、32Aが24D等の転用
時機の判断に苦しみかつ第2線陣地について計画し
なかつた原因となつた)

3 首里陸正面陣地における戦略持久の具体的要領

取扱注意

本件について提案者たる作戦真像は、専守防禦に
よる徹底した持久を考えていたが、A長・幕僚長が
び他の幕僚は戦術的な反撃乃至は最終的には攻勢移
転等も考えていたかも知れず、前2号に関連しこの
点についての事前の研究調整は殆んど行われていな
かつた態みがある。

(本件は既述の作戦方針における企図の表現ととも
に、作戦開始後攻勢について司令部内に意見の不一
致を生ずる有力な原因となつた。)

- (b) 上記のような問題点があつたのは、作戦計画の策定
に際し、兵棋等による周密、かつ、慎重な戦況の推移
に応ずる研究が必ずしも行われなかつたことに起因す
るものと考えられる。

(c) 参考所見

戦況の推移を洞察し、これに先手を打ち得るよう
に部署することは容易なことではないが、兵棋等による
事前の研究を周密に行えば、ある程度この欠を補い得
るのではなからうか。

取扱注意

d 沖縄本島における最終作戦構想及び配備

(1) 北・中飛行場地区に対する攻勢企図の完全放棄と44 MBの主陣地帯内への撤収

(a) 32Aの地上軍自体による持久を重視する思想並びに島尻地区における沿岸撃滅の実現を期するためには徹底した策案であつたと謂い得るであろう。

しかしその反面最も公算の多い敵の寡手納海岸正面からする上陸に対し、北中飛行場の制扼があまりにも不十分になるとともに、島袋付近の攻勢支どうの放棄により敵の上陸時の弱点に乗ずる反撃はたとえわが航空作戦有利な場合でも殆んど行い得ないことになる。又持久作戦自体のためにも62Dの陸正面主陣地前におけるいわゆる前地の利用即ち中頭・島尻郡間郡境付近の狭帯部を利用した強力な遅滞行動を放棄して過早に主陣地の戦いを惹起することになることを更に考慮するべきではなかつたかと思われる。

(b) 本件は、爾後上級司令部並びに航空部隊との間に大なる紛争を起すとともに、作戦開始後において32Aが上級司令部の要求に応じ得ない態勢を固定するに至つた。

又下級兵団・部隊の大部に再び配備変更に伴う徒勞をなめさせることとなつた。

(c) 32Aが再度配備変更を行うに至つた原因

○ 9D抽出直後における状況判断の際における検討の不足

取極注意
○ 比島決戦の折、大本營の本土決戦企図の明確化等による心理的影響（積極的気分の逐次喪失）

(2) 敵の上陸及び飛行場使用の制扼のための処置

(a) 44 MB₉の島尻地区集約後、中頭地区に現実に配置されていたのは、賀谷支隊（11th Bn）と飛行場部隊を改編した特設連隊のみで、全然F Aを有せず敵の上陸に対しては監視・警戒程度に止つた。

(b) 北・中飛行場使用妨害のための極め手は、僅かに150 gun 2門をもつて、しかもその最大射程よりする間けつ的な射撃に過ぎなかつたことは、余りにも弱体ではなかつたろうかと觀察される。

又32Aは国頭地区の石川岳付近を拠点とした第4遊撃隊による北・中飛行場に対する挺進新込みにも期待していたが、距離的にも無理があり、特に狭隘な石川地境を敵に扼手されたならば、到底その実施は不可能であることについての見通しが甘かつたように思われる。

(c) 32Aの処置が上記のように弱体であつたのは、主戦場における徹底的兵力の集中を期したことによるが、反面敵の弱点に乗ずる積極的意欲及び何とかして飛行場の使用を妨害しようとする熱意に欠けていたためとも謂い得るのではなからうか。（その原因は既述した所による）

(d) 爾後の作戦に及ぼした影響

取極注意

取極注意

1 上級司令部及び航空部隊から大なる不満を買い、爾後における作戦思想の調整及び32A自らの作戦指導を著しく困難にした。

2 敵をして殆んど無傷のまま上陸させ、かつ、極めて容易に沖縄本島の分断を完了させた。又爾後わが陸正面主陣地に亘る、いわゆる前地において有効な遲滞行動を行い得ず、早期に主陣地帯の戦いを惹起するに及んだ。

3 北・中飛行場を極めて早期に敵手に委し、かつ爾後長射程砲による妨害も大なる成果を上げ得ずして、わが航空作戦の指導を著しく困難にするに至つた。

4 しかしながら、主陣地に対する徹底的な兵力の集中は、32Aの持久戦を著しく容易にし、大東亜戦争において嘗てその比を見ない程有効な組織的戦いを長期にわたつて継続し得た。

(e) 参考所見

1 徹底的な部署特に主戦場に対する戦力の集中は偉大な成果を発揮する。しかしその反面判決の欠陥を是正する部署について最も周密な配慮を必要とし、この間の調和が最も困難、かつ重要と考えられる。

2 他方面の戦場における不利な戦況及び増援の目的が絶たれることにより、積極的意欲の喪失をもたらすことは否み難く、この間に勉して不屈の積極的斗志を堅持して作戦を計画・指導することは、真に空

取極注意

見からざることが察せられる。

(3) 陸正面陣地線の選定及び陸正面主陣地防禦の思想

(a) 陸正面主陣地線の選定はよく地形に適応していた
 みて、62Dが砲強を防禦力を發揮し得る根基とな
 った。

(細部は兵団以下の研究において検討する)

(b) 主陣地帯防禦の思想

○ A主力の逆襲を行つても主陣地前線(特に兩上
 原高地帯)の確保を期するか、或は24D、44MB
 を以て第2線陣地を占領させるかについて予め十
 分計画しておくべきであつたと思われる。

○ 又防禦間有利な態勢を作為して反撃又は大規模
 な逆襲を行う等の計画・準備もあつて然るべきで
 あると思われる。

○ 主陣地帯防禦の思想が、明瞭でなかつたことは、
 既述のように32Aが24D、44MBの転用の
 時機について判断に苦しむこととなり、又その陣
 地が計画準備されていなかつたことは、四兵団の
 防禦戦を著しく困難にした。

(c) 本件は、既述のように戦況の推移の予察につい
 ての検討において欠くる所があつたことに起因する。

取扱注意

のと思われる。

(4) 新任務との関係 (I巻160P)

(a) 32Aの最終配備は、20年2月上旬附与された敵
 の海空基地の推進破撃を主眼とする新任務には、既
 述のように必ずしも適応していなかつたものと謂えよ
 う。

即ち島尻地区に関しては、略々完全に任務を達成し
 得る配置にあつたが、中頭地区に対しては、極めて不
 完全であつた。

(b) 32Aがこの新任務に対して大なる感応を示さなかつた原因

○ 新任務を附与されたのは、32Aが既に最終配備
 をとり終つた後であり、今更配備の変更は殆んど不
 可能に近い状態にあつたこと。

○ 84Dの沖縄増派中止にかかわらず、増派を前提
 としたと同様の任務を与えられたこと。

○ 以上により32Aをして「1=D増強なき限り不
 可能」との態度を固執させるに至つた。

(c) このように32Aが既に独断的判断によつて新配備
 を固定した後に新任務が与えられ、しかもそれが32
 Aの現戦力及び現態勢と合致していなかつた所に本作

取扱注意

戦の最大の問題があつたものと思われる。

取扱注意

2-34

取扱注意
。再三にわたる配備変更が各兵団・部隊に与えた影響

(1) 次のように深刻な悪影響を各兵団部隊に与え、作戦準備を阻害したこと蓋し絶大なるものがあつた。

- 士気の沈滞
- 築城に対する意欲の喪失
- 従来の作戦準備が殆んど徒勞に帰し、その後の作戦準備期間は僅かに2ヶ月弱となつた。
- 上記に伴いその後は殆んど訓練を実施する余裕を失つた。

(2) 配備変更の原因

大本營の9D抽出がそもそもの原因であるが、32Aが新配備を検討するに方り、配備変更に伴うこのような弊害をそれ程考慮に入れていなかったことにもよる所大であると思われる。

(3) 参考所見

たとえ築城の開始は遅れても事前の計画は周密に行い、一度築城を開始したならば、配備の変更を極力避けることが極めて緊要と考えられる。

〔本作戦準備間第1線部隊が最も苦杯を嘗めたことは、粒々辛苦の上ようやく概成した陣地が再度にわたる配備変更により全く徒勞に終つたことであり、この間における物心両面にわたる作戦準備上のロスは蓋し測り知れないものがあつた。〕

本件は、本作戦のみならず従来の太平洋戦場及本土作

取扱注意

2-35

戦準備間においても至る所に現われた弊害であり、上陸作戦準備間においても最も心すべきことのひとつと観察される。

1 国頭支隊の用法

(1) 伊江島飛行場使用妨害の処置

(a) 本部半島からする長射程砲による間接的方法による妨害の戦法は優れた一着想であつたが、これに対する敵の可能行動を限定して考えたがために惜しくも失敗に帰した感がある。

(b) 21主力/44MB。を直接伊江島に配置するか、或は220高地正面に使用する案も考えられるが、当時の住民感情上、国頭地区を解放することは至難であつたと思われる。

(c) 21主力が本部半島地区にあつたことは、第3・第4遊撃隊の国頭地区配置と相俟つて米軍をして上陸前、国頭方面のわが兵力を過大に判断させたほか、上陸後においても結果的に常に100程度の兵力を常駐させることとなつた。

(d) 国頭支隊主力が遊撃戦に転移後支離滅裂の状態になつたことは、部隊長の性格等にも起因する所大なるものがあるようであるが、524の同支隊に対する事前の指導特に遊撃転移後に応ずる同支隊の計画準備等についての指導が全然行われていなかったことも有力な原因をなしているものと観察される。

(a) 遊撃部隊の配属及び用法

(a) 32Aの配備の薄弱な正面を補う意味において国頭山嶽地帯に配属されたことは捷号作戦準備当時においては至当な用法であつた。

又9Dの抽出に伴う沖縄中・南部の兵力減少に伴い、その主力又は1部を中頭地区に配置して北・中飛行場の使用を妨害させるか、或は自然洞窟に富む島尻南部に配置して、同沿岸配備兵団を首里陸正面に転用後における同正面の手薄になることを補わせる案も考えられるが、既に国頭地区に設定しつつあつた遊撃戦の基盤を早急に変更することは至難であり、又当時遊撃部隊幹部が中野学校において教育を受けた戦法は、山嶽地帯における遊撃戦であつたこと等からして、これを沖縄中・南部に使用する案は到底実現出来なかつたのではないかと觀察される。

(b) 参考所見

本作戦の国頭地区における遊撃戦は、わが国内において行われた最初の試みであつたが、何分にも特種教育を受けた僅か数名の青年将校が、32Aとは別箇の立場から現地に乗り込んで約半才の間に自ら遊撃隊を編成・訓練し、かつ、戦闘の実行を担任したので、遊撃戦の基盤たる住民との運繋、協同を築くのに精一杯であり、隊員に対する独特の訓練等は殆んど実施し得ない状態にあつた。

随つて必ずしも全面的に活潑、本格的な遊撃戦を展開するに至らなかつたが、米軍をしてこれが掃蕩のため多大の日時と兵力を費すに至らせたことは特筆に値

するものがある。

特にこの間において第3遊撃隊長村上大尉以下が自らの人間的魅力を以て同地区住民の全面的信頼を勝ち得、短時日の間に遊撃戦の基盤を築き上げたことは、最大の教訓とも謂うべく、これに加うるに上級司令部の指導及び支援と訓練に費する時日の余裕があつたならば、一層の成果を期待し得たであらう。

2 作戦構想及び配備に関する司令部内及び上級司令部との調整

a 沖縄本島から1=D抽出に対する32A長の意見具申の内容並びにその方法(台北会議における32A作戦主任幕僚の活動) - I巻111P

(1) A長の意見具申の内容は32Aの立場としては尤もな意見である。しかしA主力を決戦方面に転用1の件はやや行き過ぎの感がある。

(2) 32Aの幕僚としては、時間の余裕も極めて少かつたが沖縄半島から1=Dを抽出された場合、32Aとして可能な作戦の限度を具体的に検討し、A長の意見を裏付ける資料を準備することに努むべきであつたと思われる。

(3) 台北会議においても、会議のふんい気よりして出発前における幕僚長の注意に必ずしも拘泥することなく、この具体的な資料に基づいて発言し、10H A及び大本營と調整を行うべきであつたと思われる。

(4) 本件に関する幕僚活動が不足したことも、32A長の意見に反して9Dを抽出される一因となつたのではないかと観察される。

取扱注意

D 9 D の抽出に伴う新作战計画策定の方つての司令部内及び10HAとの事前調整

- (1) 新作战計画は起案者たる作战幕僚以外には単に回覧された程度であつたが、このように重大な計画の策定の方つては、幕僚全員による真剣な合同審議或は兵棋等の具体的な研究によつて更に論議を尽し、特にその思想を調整しておくべきであつた。
 - (a) 作战幕僚と他の幕僚との新古の差が大で、又陸大当時の教官と学生との間柄にあつたこと等により他の幕僚があまり相手にされなかつたことによるところ大である。
 - (b) 本件に関する事前調整が不十分であつたことは作战開始後、司令部内において思想の対立を来す重要な因子となつた。
- (2) 新作战計画特に32Aの任務の解釈はじ後の全般作战特に航空作战に重大な影響を与えるので、既述のように当然10HAに対して事前に了解を求むべきであつたであろう。
 - (a) 32Aが10HAに対して事前の調整を行わなかつたのはA段の権限内との解釈をとつたことによるが又更にうがつた見方をすれば当時の上級司令部の空気から予め承認を受けることは難しいので、先づ実行に移した上事後承諾の形式をとつたとも推察される。(方針の表現の方つての上級司令部に対する思惑もこれを裏付けているように思われる。)

取扱注意

取扱注意

- (b) このように上級司令部と事前調整を行わなかつたことは、爾後これとの間に大なる物議をかもす結果となり、32A自体が窮状に追い込まれ、爾後の作战指導を著しく困難にするに至つた。

取扱注意

c 北：中飛行場地区確保に関する10HAとの論争（根本戦略思想の事前野戦）- I巻161~165P

- (1) 32A側の主張はその現配備より観れば一応尤もな意見であり、3月中旬頃の現状において根本的な作戦方針及び配備の変更は到底無理であつたと思われる。
- (2) 本件に関し10HAと思想の統一を見なかつたことは作戦開始後32Aの作戦指導に致命的な影響をもたらすに至つた。
- (3) 32Aが遂に10HAの思想に同調し得なかつた原因
 - 32Aの独断的な配備の変更により、既に10HAの要請に応じ得ない態勢にあつたこと。
 - 32A幕僚長及び作戦幕僚の性格
 - 幕僚調整の限界

d 幕僚調整の限界

このように重要な思想の食い違いに関しては32A、10HAともに幕僚長相互次いで司令官相互の直接会談による調整を行うべきであつたと思われる。

（捷2号作戦準備当時において台北において行われた10HAの空地総合兵棋には32A長も出席されているが、作戦については幕僚長に一任されていた関係もあり当時としては司令官相互の直接会談のふんい気を醸成することは相当困難であつたと思われる。）

e 参考所見

- (1) 大部隊の指揮特に対上陸作戦において作戦準備段階における司令部内及び上・下級司令部の思想の統一は最も重要であり、これなくして作戦実施を迎えれば、恐るべき結果を招来することが痛感される。
- (2) これがため幕僚の積極的活動を要することもとよりであるが、幕僚による調整には限界があり、終局的には高級指揮官相互の直接的調整を必要とするものと思われる。
- (3) 調整に方つては、相互に虚心坦懐、大局的立場にたつて調整を行うことが必要であり、幕僚の円滑な人格はこれを円滑にする基礎になるものと考えられる。

3 作戦指導時に作戦方針との関係

a 4月3日夜における攻勢の決心—II巻31~39P

(i) 既定方針と上級司令部の要請との矛盾

(a) 作戦主任幕僚の既定方針堅持の意見は、32Aのみの立場からすれば尤もであり、又客観的にも当時の状況に即応したものであつた。

しかし何とかして上級司令部の要請に応じ全般作戦を容易にするため何等かの積極的方策について検討する意欲を必要としたのではなからうか。

(b) 幕僚長が提案し、他の幕僚が同意して最終的に採用されたA全力をもつてする攻勢案は何とかして上級司令部及びGFの要請に順応し統帥の道に従うべきであるとの見地に基くものであり、その趣旨は尤もである。

しかし既に橋頭堡を確立した絶対優勢を敵に対し全面攻勢の計画・準備は全然行われていない現状において、しかも訓練の裏付けのない大規模な透過前進による彼我混濁状態の作為を唯一の頼みとして従来の根本方針を一挙に覆えし、乾坤一擲の決戦を求めるのは、あまりに過望ではないかと思われる。

(c) 上記両者の案を折衷したし限定した兵力(24D等を基幹とし、軍砲兵を協力)を以て限定目標(鳥袋周辺高地)に対する戦術的反撃により、北・中飛行場を直接制する要地を一時的にでも奪回し、己むを得ない場合においても敵の出界を挫いてこれを混乱に導きわが主陣地前における持久抵抗を強化する目的の案につ

いても検討するべきではなかつたかと思われる。

本案はもとより不徹底の嫌みはあるが、わが航空攻撃有利に進展した場合にこれに策応して全面攻勢に出るための攻勢の支どうを奪回することにもなり、又62Dは動かさないで、比較的容易に持久態勢に復帰し得る。

又島袋附近までの狭隘部においては、必ずしも敵はその戦力の優勢を十分に発揮し得ず、又その態勢は未だ固定していないので攻撃奏功の算は絶無とは言えない。しかし24Dを起用することによりわが攻撃開始を若干遅らせる必要があることはもとよりである。

- (d) このように意見の対立を生じたのは、既述のように作戦開始前における司令部内の作戦方針に関する思想の調整が十分行われていなかつたことにもよる所大であるが、幕僚長と作戦主任幕僚の性格の相違にも起因しているものと観察される。

又幕僚会議が事前の準備なく唐突として行われ、かつ、短時間で十分論議を尽す余裕がなかつたことも少なからず影響していると思われる。

- (e) この意見の対立は爾後も長く尾を引き、遂には感情的対立にまで発展するに至つた。

(2) 攻勢計画

(a) 第1線兵団の選定

62Dを第1線兵団としたことには問題があり、むしろ24Dを最初に使用し、62Dは攻勢準備開始時に側面の掩護に任じさせる案も考えられる。

かくすることにより攻勢の発起を整齊としかつ若し攻勢失敗した場合において容易に旧陣地に復帰し得る。

- (d) 32Aが62Dを第1線兵団に選定したのは攻撃正面の地形に通曉していたことによるものと思われるが、攻勢発起までの戦線の推移及び側面に対する依託についての検討が十分に行われていない感があるように見受けられる。

- (e) 本件は爾後4月8日第2次攻勢準備も中止せざるを得ない有力な原因となつた。

(3) 4月4日における攻勢準備の中止

- (a) 理論的には44MBをもつて津川正面の敵に対せしめ依然攻撃準備を続行すべきであつたとも言い得るが、攻勢に必ずしも自信を持ち得なかつた32Aとしては己むを得ない措置であつたと思われる。

- (b) 24D等を主体とする兵力を以て島袋附近の限定目標に対する戦術的反撃の案であつたならば必ずしも中止に至らなかつたのではないかと思われる。

取極注意
D 4月5日、10HA参謀長からの攻勢に関する命令電報
に基く第2次攻勢準備とその中止特にこれを実行し得なかつた原因(II巻59~43P)

(1) 62Dを第1線とした32Aの攻撃部署ではその左側面に現出した敵上陸の脅威により中止も亦已むを得ない措置であつたものと思われる。

(2) このように32Aが攻勢を実行し得なかつたのは10HAの要求した32Aの全面的攻勢そのものがその現状に適應していなかつたことと、32Aの攻撃計画にも問題があつたこと並びに島尻地区沿岸に対する橋頭堡殲滅射撃の実現に関する従来からの構想を棄て切れなかつたことによるものと思われる。

(3) 参考所見

大部隊の運用特に対上陸作戦においては、作戦準備段階において司令部内及び上級司令部との間において思想を十分統一しておかなければ到底作戦指導の一貫性を期することは出来ないことが痛感される。

取極注意

取極注意
C 4月12日における有力な1部を以てする夜襲(II巻51~62P)

(1) 4月10日における決心

(a) 当時の全般戦況特に4.9におけるGFのL敵は動搖の兆あり---露追撃---の情報とこれを実行けるような沖縄周辺艦船及び米機隊の著減並びにわが62D第1線部隊の激斗による敵の地上攻撃の緩和等により、極めて積極的性格の幕僚長が、4月8日における10HA命令による攻撃を実行し得なかつた汚名を雪ぐべく有力な1部による攻撃を提案しA長を亦これを採用されたことは、当時における32Aの立場上、一応無理からぬものがあつたものと思われる。又当時沖縄決戦を唱道していた国内輿論の影響も少ないものがあつたと観察される。

(b) しかし僅か数ヨロを以て島袋高地の奪回を企図したことは過望と言わざるを得ず、特に若干の幕僚が支那戦線における夜襲の体験をもつてその可能性を実行けたことは大いに戒むべきことであつたと思われる。攻撃の実効を取めるためには、最少限24Dと44MBを必要としたのではなからうか。これを以てしても客観的にはなお奏功の可能性について疑問をなしとしない。

(c) 作戦幕僚の反対意見は、客観的には妥当であつたと思われる。しかし、如何なる攻撃も戦略持久の根本方針より逸脱するよう取れる論旨は必ずしも首肯し難いものがある。

例えば幕僚正面の戦果等を利用して同正面の敵を局部的に撃破する目的の有力な一部を以てする反撃等、積極的策案についても更に熟意をもつて検討すべきではなかつたかと考えられる。

取極注意

(2) 夜襲計画

- (a) 攻撃命令下達後、夜襲実施まで僅かに2日間であり他正面から転用した部隊を以て夜襲を行うのは極めて無理であつたと思われる。
- (b) 既述のように目標に比して兵力過少の嫌みがある。
- (c) 状況有利に進展した場合、A主力を以て出撃する意図であつたにもかかわらず、これが準備は全然行われていないのは必ずしも攻撃突功の確信がなかつたのではないかと思われる節もある。

(3) 失敗の原因

- (a) 目標に比して兵力過少（彼我戦力比の実態認識検討において欠ける所があつたのではなからうか。）
- (b) 既述のように第1線部隊に夜襲準備の余裕がなかつたこと。
- (c) 訓練の裏付けのない紛戦地帯作爲の戦法に期待し過ぎたのではなからうか。
- (d) 敵の夜襲対応処置（特に夜間における強固な防禦態勢、無砲の協力等）についての認識が不足していたこと。

(4) 参考所見

- 1 混とんたる戦況下において彼我の実戦力比の実態を認識し適切に作戦を指導することは至難の問題である。
- 2 積極的な作戦指導はもとより重視すべきであるが、彼我戦力の正しい認識の上に立つて行わなければならぬことが痛感される。
- 3 命令の下達から第1線部隊がこれを実行するまでに要する時間的關係について十分配慮の上、準備の余裕を与えることについては幕僚として特に戒心を要する問題と思われる。

a 4月下旬におけるA主力の陸正面転用(II巻80~91)

(1) 決心の時期

(a) 32Aが4月22日、62Dの第1線陣地崩壊の寸前に24D及び44MB₉の北方陸正面への転用を決心したことは、愈々ギリギリ一杯の時期であり、これ以上遅延していたならば恐らく首里陸正面陣地は崩壊していたであろうと思われる。

しかし当時湊川正面における米軍の上陸企図は依然相当濃厚であり、(現に米軍はこの時期に同正面に新上陸を行うべきか否かについて真剣に論議していた)作戦幕僚はなかなか決断をなし得なかつた程であつたが、この間に処して明快に転用を決意してA長に意見を具申した幕僚長の果断には敬意を表する次第である。

(b) しかし24D主力の転用は、やや遅きに失した感があり、4月12日の夜襲実施に方り、首里付近に集結待機すべきではなかつたろうかと思われる。

即ち4月12日の夜襲の目的が、A主力攻勢の動向を作為するにあつたので、これに即応して夜襲が有利に進展した場合直ちにこれを利用するためには、少くも24Dを集結待機させておく必要があつたのではなかつたか。

又62Dの戦線の破綻を早期に防止し、或は第2線陣地構築のための計画準備の余裕を得させるとともに湊川正面の新上陸に対しても機動予備としてこれに備へ得るからである。

而して糸満海岸正面に対する上陸の徴候は湊川正面に比して極めて少かつた現状よりして24D主力を

に早期に抽出することは可能であつたと思われる。

(c) 24D転用の時機が遅れたことにより、62Dの第1線陣地及び前田、仲間高地の早期崩壊を招来するに至つた。

上記は既述のように作戦計画策定時における戦況推察の予察についての検討の不足によるのではないかと思われる。

(2) 転用部署

(a) 24Dを当時62Dが辛うじて保持していた上原一瀬原の第1線陣地に投入してこれを確保させるか、或は第2線陣地帯としては好適な運玉森-翁長-幸地-前田の線を確保させるかについて検討の結果、後者を採用したことは、4月22日の状況においては妥当な部署であつたと思われる。

(b) しかし上原付近の高地帯が、長射程砲をもつてする北・中飛行場に対する制圧射撃のための要地であり、又これの喪失は前田・仲間高地の保持を困難にすること等からして、既述のように24D主力を更に早期に転用して同高地をなるべく長期に互り確保することにしても更に努力すべきではなかつたろうかと思われる。

(3) 参考所見

作戦の転機を把握して果敢よく新情勢に応ずる決心をなすことは言い得べくして行方は極めて難しい。

予め戦況の推移を洞察していわゆる読みを深くしておくこと並びに指揮官、幕僚の決断力がよくこれをなし得るものと考えられる。

○ 5月4～5日における攻勢実施(II巻96～106P)

(1) 4月29日における決心符に既定方針と第1線部隊の実情との関係

(a) 本攻勢は上級司令部の要請によるものではなく、全く324の自主的立場において行われたものであり、幕僚長の提案により未だ62D以外及び24Dの1部以外のA主力が無傷に近い状態のうちに、米軍主力と雌雄を決せんとするもので、その意気はまことに壮烈なものがあつた。しかし324の既定方針と新陣地による防禦に手一杯であつた第1線部隊の実情には合致しないものがあり、作戦幕僚の反対意見の方が、より客観、かつ妥当ではなかつたかと思われる。

(b) 324がこのような決心をなすに至つたのは、遠くは攻勢尊重の国軍の伝統にも由来するものとも思われるが直接的には未だ一度も敵に決定的打撃を与え得ずしてじりじりと消耗して行く軍の将来を考えた場合の焦慮の念が相当強く影響しているのではないかと思われる。当時の心境としてまことに己むに己まれぬものがあつたものと推察されるが、一面当初の作戦方針に対する透徹した信念及び彼我突戦力についての冷静な認識が戦況に対する焦慮、洞窟生活等によつて逐次鈍りつつあつたこと及び第1線部隊の実情把握が必ずしも十分に行われていなかつたことも否み得ない事実ではなかつたかと思われる。

(2) 攻勢計画

大規模な煙幕の使用による黎明の延長、逆上陸。小部隊の事前潜入によるパニツク状態の作為等各種の戦法を創意採用されたが、4月12日の夜襲の場合と同様に訓練の裏付けのない新戦法に勝目を賭した点においても問題があつたのではないかと考えられる。

(3) 攻勢中止の時機

IBn/321の棚原高地の奪取も未だ44MB、投入の時機ではなく、攻勢中止の時機は適当であつたと思われる。

(4) 攻勢失敗の原因

(a) 第1線兵団たる24Dが現に敵の猛攻を受けている現状特に攻勢の支どうたるべき前田、仲間高地が危殆に瀕していることについてS2&HQが十分に実情を把握していない。

(b) 彼我戦力の実態についての認識が甘かつたこと。

(c) 既述のように訓練の裏付けのない新戦法に期待し過ぎた感があること。

(5) 爾後の作戦に及ぼした影響

本攻勢の失敗により、24Dの戦力は一挙に減少し、軍砲兵も亦弾薬の大部を消耗して爾後の持久戦を著しく困難にするに至つた。又攻勢により一時的には士気を昂揚することを得たが、これが失敗による士気の低下は覆うべくもなかつた。

(6) 参考所見

1 戦況の波瀾、重圧の間に処し、よく作戦方針に透徹してこれを堅持することは容易の業ではなく、指揮官幕僚の最も修練を要する所であり、特に如何なる環境においても冷静な思考力を失わない修練の要が痛感される。

2 攻勢の失敗による戦力の消耗は著しく取り返しのつかぬ結果を招来するので攻勢への転移は最も慎重なるを要し、特に彼我の実戦力・第1線部隊の実情就中攻勢支どうの確保等について必勝の胸算を以て行うを要するものと考えられる。

f 後退作戦

(1) 5月22日における決心特に復讐陣地の選定

至当なる決心であつたと思われる。

しかし各案の検討に方り、これに伴う非戦闘員の処理を有力な一因子として考慮するべきであつたと思われるが本件について論議されなかつたことにより52Aの関心の度合が窺えるようにも思われる。

(2) 後退作戦の指導特に重傷者の処置及び有力な1部を以てする反撃

(a) 重傷者の処置も情において忍び難いものがあるが大局上己むを得なかつたであろう。

(b) 62Dを以てする反撃は時宜に即した処置であつた。実際においては翼側から溢出した敵を阻止するに止つたが、このような積極的指導が大いに役立つものと思われる。

(3) 後退作戦成功の原因

(a) 後退決心後実施まで1Wの余裕があつたこと。

(b) 企図秘匿の徹底

(c) 62Dを以てする積極的反撃

反撃注意

- 取扱注意
- (d) 雨期到来等による半軍の地形の不十分及び追撃の終
 停
- (e) 日本軍の強強

(4) 参考所見

後退作戦は周到な準備の下に敵に企図を秘匿して行うべきであり、この際有力な一部をもつてする積極的反撃を併用することは極めて有効と考えられる。

取扱注意

取扱注意

戦法の特徴

a 地下洞窟陣地

(1) 本作戦において最も偉大なる成果を発揮し、本持久作戦成功の最有力なる原因を形成しており、32Aが圧倒的な敵との戦力の差を埋めて彼我を互角の戦斗に導くべく念願した唯一の勝目であつた。

(2) 今後の対上陸作戦における砲爆対策にも大なる示唆を与えており、当時の震砲の主砲及び1t爆弾にも抗堪し得たことは着目すべき成果である。

(3) 弱点及び弊害(細部は第4の築城の項において研究)

- 敵の馬乗り戦法及びいぶり出し戦法に弱い
- 戦力の温存のみに随し易い(精神的気分の欠除)
- 通風、臭気の不良に伴う諸弊害
- 視界、射界の制限

b 敵の上陸前における射撃禁止

わが企図の秘匿特に主力の位置を隠蔽するに極めて有効であつた。敵は多大の戦力を浪費し、又爾後わが主陣地帯を偵知するため相当の犠牲と時日を必要とした。

取扱注意

c. 橋頭堡殲滅射撃

- (1) 洞窟戦法と相俟つて32Aの最も恃みとした戦法であり、訓練及び準備も最も周到に行われていたので実行される機会があつたならば大なる成果を発揮し得たものと思われる。
- (2) しかし32Aは稍々これに固執したために全般の作戦指導に柔軟性を欠いた態みがあつた。即ち湊川正面からする敵の新上陸に対し、橋頭堡殲滅射撃による敵の撃滅を期待し過ぎたために首里陸正面に対する重点形成が、やや時期を失した感がある。

d. 紛戦地帯の作為

- (1) 対砲爆対策として創意された戦法であつたが、攻撃時に夜襲においては訓練の不足及び敵の対応策により大なる成果を取れ得なかつた。
又これにやや期待し過ぎたために時に過望な攻勢の決心を方すに至つたのではないかと観察される。
- (2) 防禦においては、反斜面陣地の採用と相俟つて大なる成果を取め、特にFA・Mtによる後方遮断及びMGによる至近距離における斜射、側射、背射は極めて有効であつた。

e. 長射程砲による飛行場使用の妨害

- (1) 俵れた著想であつたが、使用火砲数の寡少、並びにこれを包含する要地を長期にわたり確保し得なかつたため数日間散発的な射撃を行い得たのみで大なる成果を取めるに至らなかつたことを32A自らが認めている。(細部は本作戦の成果の項において研究)
- (2) 上記の欠陥を是正し得たならば更に有効な妨害をなし得たであろう。しかし真に飛行場を火制下におくためには洞窟陣地よりする野砲殺を以てする制圧を必要としたものと考えられる。

f. 反斜面陣地

- (1) 地下洞窟陣地と相俟つて本作戦において最も偉大なる成果を取れ得た。
- (2) 地形上屢々後方要線にFAの観測に適する高地に慮まれ敵方斜面をMt・FAにより火制し得た効果も大であり、これなくしては反斜面陣地は成立しない。
- (3) 準備の余裕が比較的少なかつた第2線陣地帯の防禦においても極めて有効であつたことに着目するを要する。

g. 逆上陸

- (1) 敵の側背に対する小舟艇による逆上陸は時宜に即した

取扱注意
極めて果敢な戦法であり、1 師団撃破に成功したが心理的効果に止つた観がある。

- (2) 奇襲の成果を拡大するためには L M t 等の更に大なる火力装備を必要としたであろう。

b 航空支援要請の重点 - 敵艦砲の制圧

- (1) 内陸作戦に移行後においては、有効な着想であるが実際には、わが特攻機の性能等より D × 1 隻を撃沈し得たに過ぎなかつた。
- (2) 32A が敵の上陸前からこの戦法を強調したことについては問題があり、敵の上陸前においてはわが特攻の主目標は敵輸送船に指向すべきであろう。

1 参考所見

- (1) 作戦構想の成立を裏付けるものは具体的戦法であり、決め手となる戦法が創意案出され、これに基く訓練が徹底することにより初めて必勝の胸算が湧き部隊の士気を昂揚することが出来るものと考えられる。
- (2) 指揮官、真傑は作戦構想の立案に方り、これと併行して当時の状況、地形に即応する決め手となる戦法の創意に心血を注がねばならぬことが痛感される。

取扱注意

取扱注意

- (a) わが戦法に対する敵の対応策について十分検討を要し、これがためには事前の演練を是非必要とし、又訓練の裏付けのない着想的な戦法をもつて某策案の極め手としてこれを期待することは戒むべきであろう。

取扱注意

5 統御及び幕僚活動並びに将帥幕僚の性格が作戦に及ぼした影響

a A長の統御の特色及びこれが作戦に及ぼした影響

(1) S2A長の円満・崇高な人格は、全軍将兵及び全島民の敬仰的であり、S2Aが極めて困難な状況下において3ヵ月間、よく組織的抵抗を行い得た根源をなすものと観察される。

(2) S2A長が幕僚長を全面的に信頼し、これに殆んど作戦上のすべてを任されたことは、やや異例に属するとも言えるが、本状況においては、幕僚長の才腕及び特有の性格を最大限に活用する唯一の途であり、牛島將軍ならでは到底なし得ない独得の統帥ぶりであつたものと観察される。

しかもこの間にあつて5月5日、攻勢中止の断を幕僚の意見具申を待つことなく自ら下されたことは、単なる放任ではなく、よく自ら心中深く作戦指導に心胆を砕かれていた証左であると謂い得よう。

(3) 又同將軍は天性の資質に加うるに、平時から実戦の将たらんことを目標として黙々として修練に努め、作戦間においても読書を怠らず玉砕に至るまで修養に励まれたことが、このように偉大な人格を形成するに至つた所以と考えられる。

(4) 参考所見

○ 至難なる戦況下においても、よく一軍の団結を維持
取極注意

取扱注意

し、組織的戦力を維持し得る根源は、将帥の円満にして崇高な人格である。

- 戦況極めて不利な場合においても、泰然自若として幕僚長以下を全面的に信頼し、その能力を最大限に發揮させることは、常人の到底よくし得るところではなく、天性の資質に加うるに不断の練磨を必要とするものと考えられる。

取扱注意

2-66

取扱注意

幕僚長及び主要幕僚の性格が作戦に及ぼした影響

- (1) 324 幕僚長の放胆にして明快果断な性格は、A 主力の北方陸正面転用の決心に与つて大なるものがあり、これにより324の首里高地帯に対する戦力の集中が可能となつた。

又その積極的にして機略に富む性格によつて、各種の戦法が考案され、特に新戦地帯作爲の戦法は防禦戦において遺憾なくその成果を發揮した。

反面その個性が余りに強烈であつたことにより幕僚のチームワーク及び上級司令部との円滑な調整上問題があつたように見受けられる。

- (2) 324 作戦幕僚の合理的にして慎重な性格は、よく彼我戦力比の実態を認識し、324の島尻地区に対する戦力の集中を可能にするるとともにややもすれば輕侮され勝ちな消極的な意見を鞏固な信念の下に再三にわたり敢然として述べることにより持久方針の達成に寄与する所大なるものがあつた。

その反面やや自説を固守し過ぎる傾向がないでもなかつたので、他の幕僚との融和及び自己の意見が容れられなかつた場合における幕僚としての態度上相当の問題があつたように觀察される。

- (3) 参考所見

- 幕僚の性格、識見は作戦実施に極めて大なる影響を及ぼすものである。

- 幕僚は内に烈々たる信念を抱きつつ謙譲にして性格、

取扱注意

2-67

取扱注意
敵目を見にする他の幕僚の意見をも諒解包摂し、困難な戦況下においてもよくチームワークの実を發揮し得るよう、みなみさらぬ修練を必要とすることが痛感される。

- 又自己の意見が採用されなかつた場合においても、心氣一転己れを虚うして指揮官の企図達成に誠心、誠意全力を傾倒することは、容易ならざることであり、平素より一方ならぬ修養を重ねておくことが必要と考えられる。

- c 司令部内及び32Aと上・下級司令部間における人の和

32A司令部内及び上級司令部との人の和は遺憾ながら十分でなく敵に対するよりも司令部内の対立及び上級司令部との抗争によりA首脳部の精力が消耗された感がないでもない。(下級司令部との間には大なる問題はなかつた。)

このように司令部内及び上級司令部との間において人の和を期し得なかつたことは戦争の前途に既に光明を失つていた当時の全般戦局の然らしめた所大なるものがあるが、又32A幕僚長及び主要幕僚の個性が強過ぎ、他の意見をも尊重する雅量に欠けていた憾みがあつたことにも起因するものがあるようにも見受けられ幕僚としての修養上大なる示唆を与えているものと思われる。

- d 再三にわたる攻勢決心の動搖が隷下各兵团・部隊に与えた影響

再三にわたる攻勢決心の動搖は、軍司令部の威信の保持、及び隷下兵团、部隊の積極的意慾に少なからぬ影響を与えたものと觀察される。

- e 主要な作戦指導に関する幕僚相互の調整特に幕僚会議

- (i) 幕僚会議が事前の研究準備なくして行われたがために十分な成果を挙げ得なかつた憾みがある。

- (2) 幕僚長が先づ自己の意見を提案する方式を採つたために、幕僚の自由な発言を制約し殊に作戦幕僚の意見が十分に論議・検討されずしてAの全面攻勢がやや軽々に決定された感がある。

f 幕僚の第1線部隊に対する指導

- (1) 1SRの戦斗についての幕僚の事前指導は殆んど行われていなかったことが作戦初動において同部隊が混乱状態となつた有力な因子となつた。

敵の航空基地使用妨害についての熱意の不足による所も大なるものがあると思われる。

- (2) 32A幕僚の第1線進出による実情把握は作戦初期の前進陣地の戦斗間及び末期の後退作戦間は活潑に行われたが、作戦最盛期には多忙及び兵団司令部が近傍にあつたためかやや低調の感があり、特に5月4日の攻勢開始前の24D正面第1線の現情は十分把握されていなかった感があるように見受けられる。

洞窟生活特有の心理的、体力的影響も相当影響していたのではないと思われる。

- (3) 作戦幕僚が64B長を沢城から撤退させるために採つた処置並びに天久台正面における15M1R8を激励するための指導は機宜に適し、第1線部隊の感謝をかり得ることが出来た。

(4) 参考所見

- 幕僚が事務の繁忙に忙殺されることなく、重要時機には身を挺して第1線に進出することは極めて困難なことであるが、旺盛な責任観念と絶大なる体力、気力のみがこれをよくし得るものと思考される。
- 幕僚は指揮官と部隊との間にあつて指揮活動の潤滑油的役割を果たすものであり、この際特に部隊に対する華仕の心構えが労を惜まずよくこれをなし得る根本ではないかと考えられる。

6 人事及び兵站支援

a 兵力の自力増強

32Aが兵站部隊等凡そ利用し得る限りのものを挙げて第1線戦力化した創意と努力は大いに学ぶべきである。

比島向け滞留兵器（重火器小銃については100D相当）を活用し得たこと及び防衛召集者によつて兵站関係要員と肩代りさせ得たことが与つて大なるものがある。しかしその反面第1線兵団に弾薬・糧秣の大部を交付したのでその兵站が鈍重となつたことも否み得ない。

b 主要戦斗における損耗の実態

(1) 予め準備した築城を利用する防禦において62Dがその戦力を悉に消耗するまでには1ヶ月以上を要したが、24Dは攻勢実施に方り僅か2日間にしてその戦力を悉以下に減少した。（尤も221Rは4月12日の夜襲により相当数の又その他の部隊も攻勢直前の防禦戦斗により若干の損耗を生じていた）

(2) 嘉屋武復原陣地に向う後退間の損耗は後退開始時における兵力の40%に相当する。而してその過半は防衛召集者であつたが、後退行動における指揮・掌握の困難性及びその軍隊に及ぼす離心性をも物語っているものと謂い得よう。

c. 志気及び規律振作のための処置

(1) 士気昂揚のための処置

- 32Aは捷2号作戦準備当時、洞窟築城と橋頭堡兼波射撃及びこれに基づく訓練により必勝の信念を有していた。
- 9Dの抽出、84Dの派遣中止は、32Aに必勝の希望を喪失させたが、洞窟築城によつて戦力差を埋め彼我を互角に導こうとする戦法は、依然全作戦間を通じ、32A全将兵の士気を支えるバツクボーンをなしていたものと観察される。
- 攻撃における紛戦地帯作為の戦法は事前訓練の不備等により成果を挙げるに至らず攻勢による士気の振作は不成功に終つた感がある。
- 天久台正面における15M1Rの奮斗に対し、32A幕僚が傍受情報による米軍の窮状を通報したことは大きな効果があつた。
- A長の第1線訪問による士気の昂揚は行われなかつた。(米軍の不断の砲撃等によりA長の前線視察は極めて困難であつたことによる。又AOPが敵Mtの射程に入つてもなお首里にあつたことは、この欠を補つていたものとも謂い得よう。)

(2) 規律振作のための処置

- 32Aは特に作戦準備間における島民との混住の厳禁等により規律の振作を図り、島民との間にも概して大なる問題を生じなかつた。
- 作戦間における信賞必罰の勵行
感状付与等による士気の昂揚は適時に行われたが当初の嘉敷の防御戦斗において偉大な戦果をあげた131Bの戦果等は必ずしも上級司令部に把握されてなかつたものと見え、A長及びD長からの感状、賞詞の附与は行われていない。
しかし、玉砕を前にした極めて困難な状況にあつたにもかかわらず有力な部隊長の罷免を断行している点は着目すべきである。

(3) 参考所見

- 戦略持久作戦特に離島作戦における部隊士気の昂揚は極めて困難であるので指揮官、幕僚は特にその対策に意を用いる必要があり、これが根柢をなすものは必勝の戦法の創意とこれに基づく訓練の徹底にあるのではないかと考えられる。
又上級司令部としても、この点について特に任務達成についての希望を失わせないよう格段の配慮を必要